

論文審査の結果の要旨

氏名：安住文子

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：感覚への気づきを通した身体の学びの構造に関する研究

審査委員：（主査） 教授 高橋正則

審査委員：（副査） 教授 鈴木理 教授 青山清英

教授 北村勝朗

本論文は、「感覚への気づきを通した身体の学びの構造について解明し、動きの学びを支援する指導の在り方へ寄与する知見を得ること」について考察した論文である。そのリサーチクエスションは、人はいかにどのように学ぶのかとして、熟達を中心テーマに設定し、熟達における学びの様態および熟達成熟期に至る学びの過程の詳細を明らかにしようとするものである。

論文では、熟達、感覚を通した学び、および相互作用を通した学びといった本研究の主要概念に深く関連する研究の背景および先行研究の動向を検討した第1章に始まり、本論では、第2章から第4章にかけて、熟達過程の初期段階（第2章）および成熟段階（第3章）における相互作用を通した学びの構造と熟達者の熟達体験から捉えた学びの過程（第4章）といった視点から、学習者本人の体験が感覚への気づきを通した身体の学びについて関連する要素を余すことなく拾い上げている。そして第5章総合的考察および第6章結論では、要素間の関係などをまとめて、感覚への気づきを通した身体の学びの構造モデルを提示し、研究の成果として新たな知見を見出している。

本論文は以下に示す意義を有している。第一に、学習者本人の視点から感覚に着目して身体の動きの学びの構造を考察している点である。動きの学びにおいては、目に見える動作に加えて、「目に見えない動作感覚」や「運動感覚」への気づきも重要である。しかしながら、スポーツおよび健康分野の教育や指導現場では、そういった感覚の共有が指導者と学習者間でうまくなされず、気づかせたり、教えたりすることが困難な問題が生じることがある。感覚への気づきを通した身体の学びは、閉じた学びの過程ではなく、学習者自身の身体と学習者を取り巻く環境との相互作用を通して行われることから、社会構成主義の認識論的枠組みに基づいて人の学びの関係性に着目した上で、感覚を通した学びの構造を論じている。第2章では、初学者においては、短期集中学習過程における熟達体験を、本人の振り返り記述による内省報告に基づき、SCATによる質的分析法で分析を試みている。本章では、学びの初期における熟達体験の構造を階層的カテゴリーで整理し、熟達体験モデルとして示しており、特に、学習者に生じる戸惑いや不安感は、学びの深まりに応じて、克服するあるいは回避する課題から徐々に、より肯定的な学びの契機として位置づけられる点を明らかにしている。また第3章では、熟達者における学びの構造について論じている。熟達者は、収集した情報をどのように判断し、動作の起動・修正につなげているのか、自己の内面に加え、他者との関係性を含めた複雑な感覚や対戦相手の読み、心理的駆け引きなどの目に見えない現象に関する感覚について考究している。そこから、熟達者の学びの様相を、自他を同期させる操作的な体験として位置づける重要性を示している。以上のように、本論文では、学ぶ主体の内的世界に深く潜入した形で、感覚への気づきを通した熟達の段階における学びの構造に関する説得的な説明を成し遂げており、学術的な意義として認められる。

第二に、本論文は、熟達段階ごとの身体の学びの構造を示しただけでなく、その熟達過程にも焦点を当てて、どのように学びを深めて熟達化がなされたのか、その詳細を示している点に大きな意義がある。第4章において、学びの初期から成熟期までのさまざまな経験がどのように関連づけられていくのか、ライフストーリー法により考究している。ここでは、調査対象者に共通する熟達体験として「学習初期における印象深い体験」や「探求的な目標を追求し続ける環境」の二点を見出し、学びの深化の過程に関する研究成果を示している。また、第2章から第4章において見出された知見を踏まえて、熟達段階と

感覚への気づきに沿った学びの様相の変化について、感覚への気づきを通した身体の学びの構造モデルを示して説明している（第5章）。そして、感覚への気づきは、熟達段階に応じて深化し、さらに自他との相互関係を通して、身体の学びを深化させていくことの重要性を研究成果として示している。つまり、熟達化は **deliberate practice**（熟考された練習）の蓄積によって成し得るとされるが、これが、どのように開始して蓄積され、その熟達過程でどのように学びを深めていったのか、という問いに対して、これらの研究成果により説得力のある答えを導き出しているといえる。

本研究には、多様な競技や対象者を対象とした考究や、より多様性をもった方法論を用いた研究蓄積の必要性といった課題は残されているものの、本論文の問いを引き継ぎながら、安住氏が提示した新たな知見や課題を足掛かりとして、今後のさまざまな研究が進んで行くことが期待される。以上のことから、本研究の成果は、スポーツ・健康領域における身体の学びや教育発展に貢献するものであり、オリジナリティおよび完成度の高い研究として評価することができる。

よって本論文は、博士（教育学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以 上

令 和 5 年 1 月 1 2 日